
おさな妻

高岡啓次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おさな妻

【Zコード】

N8020V

【作者名】

高岡啓次郎

【あらすじ】

少女は10年という歳月でおさな妻になっていた。

同年代の友人たちとは異なった生き方にたじろぐ周りの人々の反応。少女はたくましく母親として生きていく。

(前書き)

10年前に会つた少女がおとな妻に……その変わつよつたじゆく
私。10年の間にねきた変化。たくましく生きよひとする若い母を
描く。

おさな妻

高岡啓次郎

小さな顔に、母親ゆずりのパツチリとした瞳をもつ少女は、小学生にして周りから抜きんてるほど背の高い女の子だった。

細い足が一緒に遊ぶ近所の男の子たちの胸の高さまである。そのことを恥ずかしがるように、ときどきわざと身を屈め、縄跳びや鬼ごっこに興じる姿は可憐そのものだった。女の子の半分ほどしかない弟が、姉にまとわりつくようにじやれついていたのも実に印象的な光景だった。

私は塗装工事に携わっている最中、なんども子供たちに声をかけた。屈託のない笑顔で受け答えをする女の子が、利発な目をクリクリさせて照れていたのはつい昨日のようだ。

十年ぶりに私が少女を見たのは、秋がすっかり終わった十一月の末だった。同じ家の塗り替えに従事していた私は、女の子の変わりようを見るのをどこかで楽しみにしていた。

工事を初めて何日か経ったとき、別のところに住んでいたらしい彼女は軽自動車を運転して母親と祖母が住むこの家にやってきた。一階が祖母で、二階に母親が住む実家というわけだ。運転席からおりてきたとき、顔立ちに残る幼いころの面影で、私はすぐにあの子だと気づいた。当然ながら、彼女はもはや女の子と呼べる年齢ではなく立派な大人の女性になっていた。スラッシュと伸びた身長は予想どおりといつてもよかつたが、子どものころのような田立つほどの長身でもなかつた。

「すっかり大人になつたね。おじさんを覚えているかい？」

私が尋ねると、彼女はコックリとうなずき、前髪の間から瞳をキラキラさせて微笑んだ。化粧つけのない素顔のままの彼女は、襟の大きな黒いジャケットのポケットに寒そうに手を入れながら、母親の住む一階の階段を軽やかな音をたてながら上がつていった。

「そろそろお茶にしませんか？」

一階に住む祖母が声をかけてくれた。寒いから中に入つてくれさいという。私は祖母が開けてくれたベランダの大窓をまたいて部屋に入った。すすめられた席につきながら、いま一階のお嬢ちゃんに会いました。すっかり大人になりましたねといつと、

「あの子は、もう一人も子どもがいるんだよ」

祖母はいくぶんため息まじりに言って、急須に湯を注いだ。

「信じられない！ もうお母さんですか？」

「そう、上の子は三歳になる。高校を卒業してすぐ結婚し、近くのアパートに住んでるの」

私はただただ驚いて、出された和菓子にかじりついたままポカんとしていた。どうにも実感がわかなかった。今ごろは大学生か、どこかの〇しにでもなつていると勝手に想像していたからだ。

「ストレスがたまつて大変みたいで」と祖母は言った。

「といいますと？」

話を聞きたい私がさぐりを入れると、今回の工事の依頼主である祖母は、何の警戒心もなく話しました。

「まだ二十一歳で一人の子持ちだよ。本当は遊びたい年ごろだからねえ。同じ年代の友だちとは話も合わないらしいよ。働いている友人たちは自由なお金や時間がたっぷりある。でも自分はダンナの世話と子育てで全時間を費やしている。辛いときもあるみたいよ」

「そうかもしぬせんねえ」

私は祖母がいれてくれた茶をひとくち飲んでから、話にあいづちを打つた。しかし考え方によつては早い結婚にも良い面はあるはずだ。私は思いついた考えを告げてみた。

「でも、早く子どもを大きくするのも悪くはないですよね？」

「おつきくなつたら楽になるだろうけど、しばらくは大変だねえ。ショッちゅう子どもを預かってくれつて来るのよ。それでいて自分はいつまでも携帯いじつているから私ときどき怒るの、そんな時間があるんなら子どもを自分でみなさいつて」

祖母は苦笑を浮かべてそう言った。うつむきかげんの表情はまだ若々しい。六〇代なかばの年齢にして、孫はあるか、ひ孫までいる自分をどこかで自嘲しているようにも見えた。「子どもが大きくなるまでしばらくは大変だ」という言葉のなかには、頻繁に子守を頼まれる母親や自分のことも含んでいたに違いないと私は思った。

「ううそさまでした。仕事に戻ります」

そういうて私がソファーから立ち上がり、祖母は人のいい笑顔を見せ、寒くて大変だろうけどよろしくお願ひしますと言つた。

昼休み、私は近くにあるわが家に帰り、妻に午前中のでき」と話をした。かつて一度ほど仕事をしたとき、妻も一緒に手伝つていたので覚えているか訊いてみた。

「上代さんの女の子を覚えているかい？」

「ええ、あの背の高い子でしょ？ いつも外で遊んでいたわね」

「そう、今日あの子に会つたんだよ。すっかり大人になつていた。十代で結婚したらしく、もう一人も子どもがいるんだってさ。俗にいう、おさな妻、というやつかな」

その言いかたは幾ら何でももう古いでしょう。そう言って妻は笑つた。でも私は、あえてその古い言いかたが、どんな呼び方よりその若い彼女にピッタリくるような気がした。年齢的には必ずしもそうとはいきれないが、家の周りで遊んでいた幼い少女の印象がありにも鮮明、かつ昨日のことに思えたからなのだ。

再び現場に戻つて仕事をしていた私は、夕方になつてから学生服をまとつた男子高校生と階段の踊り場で遭遇した。一階に住む息子に違いないと私は思った。

私がコニーチワといふと、五分刈りの頭をコクンとさげ、細い体に似合わない低い声で挨拶を返した。あれがあのときの男の子かと私は気づいたが、むこうは初対面のようなハニカミを見せて家に入つた。明らかに覚えていないといった表情だった。身長はどちらかといえば低いほうで、姉がもつスラリとした体形はなかつた。

あのとき七歳ほどだった男の子は今では一七歳くらいだろう。高校一年か一年という年齢だ。

そのとき私は唐突に、そういえば子どもたちの父親はどうしただろうと思った。工事に入つて四日になるが、以前なんども見かけていた彼らの父親に会わないことに気づいたのだ。私は、この辺りを毎年なんども車で通る。いつも日曜などに大きなワゴン車が停まつていたはずだが今はない。一階に住む彼らの母親が運転する黒い軽自動車だけがときおり横づけされていた。ダンナさんはどこかへ単身赴任しているのか。私は勝手にそんな想像をめぐらしていた。

母親はどこかへ勤めに出ているように見えた。以前とくらべて少しも歳をとらないように見えるが、考えたら四十の半ばを越えているはずだった。壁の色あわせのときに会話をかわした母親は、顔こそ昔のままの童顔だが、目に以前のような光がなく、声にもなぜか生気がなかつた。グリーンの壁を望んでいるのは分かつたが、自分がお金を出さないせいもあるのか、何でもいいと言つて一階に上がつていくのだった。朗らかで笑顔がひときわ明るかつたイメージからすれば、とても元気そうには見えなかつた。

まもなく私はその理由を知ることとなつた。翌日のお茶の時間に祖母が訊きもしないのに話しだしたのだ。

「娘のダンナが家を出でていつてしまつたのよ。詳しく述べられないけどね」

祖母は、今まで何度も仕事を頼んでいる私に、なんの警戒心もなくそう打ち明けたのだ。私はどう言葉を返したらいいのか分からず、お茶を口にふくんで話の続きを耳をかたむけた。

「わたしは立ち入らないようしているの。若い人たちの考えは良く

わからないからねえ

そう話す祖母は実に思慮深いまなざしをしていた。何もかもを分かつてているように私には思えた。まして出ていった娘婿は、九十歳を過ぎて施設に入った母親の空き家に住んでいるという。娘をほつたらかして出ていった婿を、自分の母親の家に住まわせることを許した彼女はある種の敬意をもって見つめてしまった。娘夫婦がいつかやり直してほしい。そのためには出ていった婿さんを近くにつなぎとめておきたい。冷却期間をおいて元のさやにおさまるかもしれない。そんな望みをかけていたのかもしれない気がした。そのために、別れてしまえば他人になってしまふ娘婿に、帰るための一本の糸を垂れていたのではないかと私には思えるのだった。

翌日の午後、母親とそつくりの？い軽自動車を運転して、おさな妻、はやつてきた。あいさつをかわしたあと、彼女は私に尋ねた。

「おじさん、ベニヤ板のうえにペンキは塗れるの？」

「ああ塗れるよ、何色に塗りたいの？」

「しろ」

「そうかあ、塗るなら水性ペンキのほうがいいよ。吸い込まないできれいに塗れるからね」

「そうなの……」

「ベニヤを持つておいで、おじさんが時間あるとき塗つておいてあげるから」

彼女はちょっとためらった表情を見せたが、すぐに目を輝かせ、いいですかと黙つて再び車を出した。一時間もしないうちに彼女は戻ってきて何枚かのベニヤ板を車からおろした。何枚あるのかと私が尋ねると三枚ですと彼女は答えた。

ふろしきを広げたくらいの大きさの四角いベニヤがおろされた。

白く塗つて台所の壁に貼るのだといつ。

私は言った。「おじさんはいま高いところで仕事をしているから塗るのは明日でもいいかな？ それとも今自分で塗つてみるかい？」

「はい、自分で塗ります」

間髪入れずにはくはそう答えた。

「そういうの、わたし好きなんです」とも言つた。

「そりかあ、じゃあ自分でやつたほうがいい。今おじさんが用意してあげるから」

「すみません」

私は駐車場のアスファルト上にブルーシートを広げ、その上に三枚のベニヤ板を並べた。白いアクリルの水性ペイントは常に車の中に持ち歩いているので、ものの数分で準備はととのつた。

「さあ塗つて」。ペンキを刷毛の先端につけて、缶の縁でいちど叩くんだ。ペンキが垂れないからね。それからじつやつておおらかに動かすんだよ」

彼女は利発な瞳を大きくあけてハイとうなずき、さも楽しそうにペンキを塗りはじめた。見るとなかなか手つきがいい。教えたとおり、おおらかに刷毛を動かしている。

「つましいじゃないか。その調子その調子」

私は足場の上から声をかけた。下を向いた彼女の表情は見えないが、生き生きとした動きからは、その表情も想像できた。一枚を塗り終えたころ私は言つた。

「一回塗つたら一休みしてお婆ちゃんの所でお茶でも飲んでなさい。そうすれば上塗りをかけるのにちょうどいいから」

私が上から声をかけると首をコツクリとあげ、幼さが残るやえ歯を見せて笑つた。私は若くわかくして家庭に入つた彼女が急にたくましい母親に見えてきて、ある種の感動をおぼえながらその後の作業にいそしんだ。その間に、いくらもしないで彼女は三枚のベニヤを塗り上げた。

午後から私が再び現場に戻つたとき、ベニヤはきちつと上塗りが施され、白い肌を陽に美しくさらしていた。ちょうど祖母の玄関から出てきた彼女は、きれいに塗れたねといつ私の言葉にこぼれるよつな笑顔を浮かべて礼を言い、かかつた塗料代を払おうとした。世間

知らずのおさな妻だと思つていたら、がいして礼儀正しいことをいうではないか。私はすぐに言葉を返した。

「とんでもない。ずっと昔からお世話になつてている大切なお客様だよ。他にも塗りたいものがあつたら持つてらつしゃい」

彼女は静かにうなずいた。予報では夕方から嵐になるという。雨の当たらない場所に白いベニヤと一緒に運び、私は作業に戻った。

一日間の嵐は台風並みの被害を各地にもたらした。現場の足場は大丈夫かなと気にはなつたが、雨天ならではの雑用におわれて時は過ぎた。

三日目は嘘のよつな穏やかな日となつた。私は壁が乾くよつ、少し遅い時刻に現場に出て作業を開始した。

まもなく、おさな妻の運転する軽自動車が入つてきた。すぐに三歳だという元気な男の子が車から飛びってきた。

続いて運転席から出てきた若い母親を見て私はドキッとした。きのうまでとは見違えるような装いと、整つた化粧をしていたのだ。彼女はすぐに足場の上にいる私に気づき、妖艶ともいえるような大人の微笑を浮かべて先日の礼を述べた。私は幼かつた女の子の変わりように、あらためて不思議なたじろぎを感じ、足場の上でフツと息をはいた。

最後の日、一階にいたおさな妻の母親が珍しく私に声をかけた。今日は朝から工事依頼主の祖母は留守だつた。

「コーヒーをたてましたから飲んでください」

彼女がそう言つたのは、今まで一階に住む母親にまかせつくりにしていたのを埋め合わせようとしたのかもしれない。私はたじろいだが、玄関から見える茶の間のテーブルの上にコーヒーカップと菓子がすでに置かれ、湯気が薄暗い部屋の空氣の中で白んでいる。私は遠慮なくお邪魔して、コーヒーを口にした。

「娘さんは器用にペンキを塗りましたよ」

と私がいふと、母親はそのことを知らなかつたらしく、むかしのよ

うに屈託のない笑顔を見てくれた。ダンナさんとはどうなっていますか。そんな訊けるはずもない質問を私が想いの中でしていると、窓からそぞろ西日が彼女の頬を赤く照らした。そのとき彼女の眼じりにクツキリと浮かびあがつた皺を、私はどこか哀しい気持ちで見つめた。

私がその母親を見たのはそれから一か月が過ぎた真冬のさなかだつた。評判のいいフライ屋に久々の外食に出かけたとき、走り回つて働く彼女の姿があつた。まだ勤めたばかりなのです、と彼女は言つて気丈な笑顔を見せていた。

その娘である、おさな妻、と再会したのは、さらに数週間あとだつた。マーケットで、荷物も持たずによっすぐ歩いてきた彼女に私はすぐに気がついた。コンバンワと声をかけると、向こうもすすぐにはがついたようだつた。

「こないだ夜遅くお母さんと会つたよ。フライ屋さんで頑張つて働いているんだね」

私がそう言つと、彼女は無言でうなずいた。

そのときの彼女の表情には、自ら若くしてなつた母としての顔と、ひとりぼっちになつた自分の母親を気遣う娘の顔の両方をにじませているように見えた。静かに微笑しながらおじぎして去つていったおさな妻のつしろ姿は、どこか哀しいまでに凜としていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8020v/>

おさな妻

2011年10月9日14時55分発行